

# ほほえみ😊結ぶ🤝しめ新聞!

～NPO法人 志免地域支え合い互助基金 第5号～



## 目次

- ・戦後80年特集！！  
2～3ページ
- ・人間魚雷について  
4ページ
- ・東さんの紹介  
5 ページ
- ・インタビュー内容  
6～7ページ
- ・まとめ  
8ページ
- ・戦時中について  
10～11ページ
- ・おわりに  
12～15ページ

## この新聞は？

NPO法人志免地域支え合い互助基金と志免中学校の有志が発行する新聞です。志免町のなかに多くある支え合いにスポットをあてて、この町に多くの支え合いがあることを知ってもらい、心を豊かにし、安心して生活ができますように！という想いを込めて発行しています。

# 戦後80年特集!!『いのち』

あずま つとむ

## ～東 努さんの体験談を通して～

1945年8月15日は、日本にとって忘れる事のできない日である。その日から、今年で80年を迎える。

あの時、終戦を告げるラジオ放送を聴いていた人がどれくらい存命なのだろうか、

戦争を知らない世代が多数となった日本。私達が暮らす志免町も同じ状況だ。

この町で支え合い新聞部を結成し、「ほほえみ・結ぶ しめ新聞」を制作する志免中学校の有志の方々や大人部員もその一人だ。

世界を見渡せば、戦争下で暮らす地域や、一触即発の地域もある。私達が暮らすこの日本も、いつどうなるかわからない。

ただ平和を祈り、何も行動を興さないまま暮らし続けて良いのだろうか？

その意識が芽生え始めたその時であった。

東 努さんとの出会い。そして、唯一の被爆国である日本に存在し、活動を続けている日本原水爆被害者団体協議会が、2024年のノーベル平和賞を受賞したのだ。

今しかない！

このタイミングに背中を押して頂き、今回の「ほほえみ・結ぶ しめ新聞」第五号では、全編を通じ、『いのち』を考えるきっかけとなることを願いたい。

## 人間魚雷回天 元乗員 東 努(あずまつとむ)さんにインタビュー！！

今回、幾多のご縁が重なり、東 努さんにインタビューをさせて頂く機会を得た。

「運命に体当たり」東さんの生き方はそれそのものだ。中でも、若い頃に命をかけたのは、最も命をかけたくなかった**戦争**であった。

今号では、「いのちとは？いきるとは？」をテーマに、東さんと学生部員が繋がり、「いのちの質」を求める動きが始まることを期待したい。

そして、超高齢社会を迎える志免町の皆さま方にも、戦後80年を迎える節目の今年、共に考えてみませんか？と呼びかけたい。

志免中学校のある教室で行われたインタビュー。張りつめた空気感。各質問に対し、腹の底から精一杯の声を出して伝えて下さる東さん。学生部員も、それに応えて一所懸命にイメージしながら魂で聴いている。時に涙を流す人の姿を観るにつけ、魂と魂が触れあっていると感じる。

「この感動をいち早く記事にして皆さんにお届けしたい！」学生部員の行動は、いつになく速く情熱的だ。。しかし、心を動かしたあの場面を文字に変換して伝えようとすればする程、いかに表現すれば東さんの気持ちを表すのか徐々にわからなくなっていく。

『いのちを懸けて生きた』人の想いを理性を使って社会に伝える。このチャレンジの難しさを味わい、この苦しみから逃げたい想いと戦いながら制作した今回の新聞を、どうぞ暖かい心で最後までお読みください。そして、皆さまそれぞれの「いのちの質」を見つめて頂ければ幸いです。

支え合い新聞部大人部員 鷹尾

# 人間魚雷について

「真っ暗な海の中に一人ぼっち、敵の軍艦を探し求め、  
見つけた敵の軍艦に体当たりを試み、

敵の軍艦とともに大爆発して命を終える」

…… それが人間魚雷「回天」という兵器だ。



- 全長14.75mで、先頭に1.55トンの火薬を積んだ潜水艦。
- 乗員1人が潜望鏡と簡単な航法装置を頼りに操縦、乗員もろとも敵艦に体当たりする特攻兵器である。

引用元 予科練平和記念館

人間魚雷「回天」が登場したのは、太平洋戦争末期1944年11月20日に実戦で初使用、420基が生産された。



回天の乗員をモデルにした映画

『出口のない海』(でぐちのないうみ)は、横山秀夫の同名小説を原作とした、日本の映画作品。太平洋戦争時、回天特別攻撃隊で出撃した若者の姿を描く。

引用元 松竹株式会社

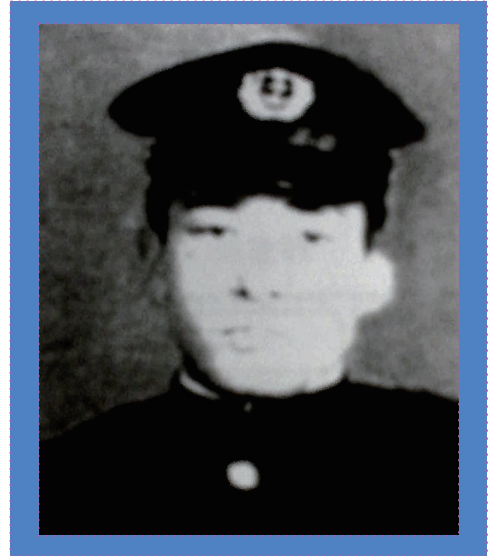
ちなみに・・・海軍には「回天」以外にも特攻兵器があった。

しんよう おうか かいりゅう こうりゅう ふくりゅう  
震洋、桜花、海龍、蛟龍、伏龍……など

あずま つとむ

# 東 努さんの紹介

東 努さん  
当時17歳  
飛行予科練習生  
2024年時点で  
99歳



当時東さんは、少年の憧れだった、飛行予科練習生を目指していたそうです。

飛行予科練習生は14歳半から17歳までの少年を全国から試験で選抜し、基礎訓練を受け、航空兵になります。それから更に、難しい試験に合格しないと入れなかったそうです。東さんはその試験に合格しました。

合格して航空兵になったある日「秘密兵器がある」と言われます。それが"人間魚雷"でした。

そこで、「人間魚雷に乗るか乗らないか」と聞かれ、東さんは乗ることにしました。訓練に参加し、訓練中に島や岩にぶつかって帰ってこない人もいました。

訓練の順番が東さんに回ってくるときに戦争が終戦しました。

# インタビュー内容

中学生の私たちには東さんの話してくださった内容は、とても深く、理解が難しいものでした。

しかし私たちなりに噛み砕いて、東さんはなにを伝えたいのだろうと考え、疑問点も織り交ぜながら文章にしました。ぜひ最後までご覧ください！

## Q1, 当時楽しみなことはありましたか？

A, まずない。

寝ているときは死ぬことや、親や兄弟のことを考えていた。

## Q2, 出撃の命令を待っているときはどんな気持ちでしたか？

A, 何人かずつ行くけど台数が少ないからそんなに行けなかった。

自分も早く行きたい。早く死にたい。

何故生きたいと  
考えなかったの  
だろう？

## Q3, 終戦後のお気持ちは？

A, 天皇陛下のお言葉が信じられなかった。

はじめはラジオで流されたが何をおっしゃっているのかわからなかった。そのため「勝利に向かい一層頑張れ」というお言葉かと思った。後に終戦の合図だと知った。しかし私は当時立てこもっても戦争を続けたいと思った。

どうしてそんなに戦争  
を続けたかったのだろ  
う？

## Q4, 襲撃の命令を待っているときの気持ちはどうでしたか？

A, 戦友が出撃すると、早く自分も出撃に行きたいと思った。

死ぬことは怖くない。いつ死んでもいい。家族を守りたいとおもっていた。

## Q5, 戦争についてどのように考えていますか？

A, 平和を守らないと。戦争は勝たないとだめ！！負けたら周りも…

戦争は絶対にしてはいけない、戦争というのは人間同士の殺し合い。これまで戦争ばかり。年月が経つにつれて原子爆弾などを使うようになる。

## Q6、戦時中のエピソードはありますか？

A、たくさんある。私は当時海軍の飛行予科練習生長崎県立工業学校、機械科にいた。

当時20歳になると軍隊に入らなければならなかった。それなら18歳のときに飛行予科生になったほうが良いと考えて飛行機試験を受けた。身長、体重が大きくないとだめと言われ、嘆願書を出すために、指を切り血を出し、血で字を書いた。しかし、血が止まるため3回程指を切り、採用してくれと願書を出した。

その件で新聞にのる。思いが伝わり試験に合格した。1日ずつ試験をしていく。点数が出る。不合格な点数を出すと、その時点でもう受けられない。人がどんどん減っていく。私は最初の試験に合格し三重の海軍に入った。軍人らしい訓練は2年目から始まった。

## Q7、「命の保証はないが潜水艦に乗るか？」という問いに対し、「乗らない」という選択肢を考えたことはあったのでしょうか？

A、まず話すのは13期の飛行予科生練習生全員集合があったとき。

講堂の周りには兵隊さんが鉄砲を持って待っている。兵隊さんは「今から話す内容は他言してはいけない。一番偉い航空隊の司令から日本に新兵器ができたと報告を受けた。お前達ような若い人たちに合っている！しかし命はない。お前たちには選択肢がある。一、乗るか乗らなか。二、辞めるか。この件はひとにゆうたらいかん！」と話した。

その話を聞いていた中から900人中200人が選ばれた。

東さんの班は30人中二人が採用。名前が人間魚雷ということがわかったのは卒業後のことだった。汽車に乗せられ呉にいった。「お前たちがのる兵器はこれだ」と教えてもらった。

それから1週間。まだ制作中の人間魚雷を見に行った。爆薬の部屋は外すようになっていない。ほんとにこのまま、私が中にはいったまま当たるんだと感じた。新しい練習場につれていかれた。それから約1年近く、何百人といるのに練習する機械は2、30台しかない。私は練習できない。

練習中に乗っていて事故が起こり、そこでなくなる人もいた。私の戦友がアメリカが落とす爆弾でなくなった。1人の死体を必死にさがした。漁師が見つけた。服を洗った。服から血が出てきた。実践に乗った搭乗員1375名。106人戦死した。

しかしわたしは乗らないという選択はなかった。私は早く死にたいと思った。出撃しに行きたいと思った。

# まとめ

よく「戦争はいけない」と聞きますが、東さんのお話を聞くまで、戦争を経験していない私たちは「なぜいけないのか」という理由を深く理解していませんでした。

しかし、戦争を経験した東さんの「戦争は絶対にしてはいけない！」という言葉は重く、説得力があり、その場にいる全員が聞き入っていました。東さんは「戦争で死ぬのは怖くない」とおっしゃっており、「戦争で死ぬのは怖い」と思っていた私たちにとって衝撃的な言葉でした。

また今の時代は好きなものを食べられたり、好きなことができたりと、自分の意志で行動できますが、戦時中は食べられるものは決まっている、衣服が制限されているなど今と比べて自由がない生活でした。

自分のやりたいことができるという、当たり前ではない「ありがたさ」を忘れずに生きていきたいと思いました。

そして、東さんの「戦争は絶対にしてはいけない」という思いを今の中学生に伝えていきたいです。



富士正醤油醸造元株式会社 藤 浩太郎 様

多感な年代である中学の時に、大人と一緒に志免社会にある『支え合い』活動や、志免社会に元気と勇気、そして明るい希望を与えて下さる方々を取材できることは、きっと皆さんのこれからの役立つ経験であるし、志免社会にとっても大きな財産です。今後のご活躍を楽しみにしています。



株式会社飯田工務店 小山田 義人 様

明るい未来に向け、過渡期にあると感じる現在。皆さんがチャレンジしている『支え合い新聞部』は、まさに明るい未来を予感させる取り組みだと思えます。明るい未来をみんなで創る。そのフロントランナーである皆さんを応援しています。



お肉の田中屋 田中 清昭 様

チャレンジすることは、とっても素晴らしい行動だと思います。好奇心を持ち、いろんな事に挑戦して下さい。そして、そういう経験を積ませて下さる先生やご両親、そして志免町の大人達に感謝できる人に成長して欲しいと思っています。



# 戦時中についてー食生活ー

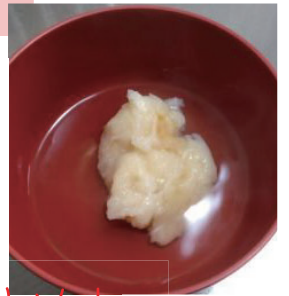
## 配給について

米、味噌、醤油、塩などが配給などでしか手に入らなかったです。配給の切符で食料などをもらっていました。また、配給で貰える食料は少なかったです。

## 水団(すいとん)

小麦粉を水で丸めて作ったもので、当時は出汁も具もないもので美味しくないそうです。戦時中にはお米の代用食として広く食されました。

画像元「作ってみた戦時下の食事」  
自宅で再現レシピ | 大人の近代史 ~今だからわかる日本の歴史~



## カレーライス

英語が禁止されていたので、<sup>からみいりしるかけめし</sup>辛味入り汁かけ飯と呼ばれていました。

## 麦ご飯

今とは違い、お米はあまり入ってはいませんでした。また、野菜の葉やさつまいもなどでかさ増しをしていました。

画像元



# 戦時中についてー日常生活ー

画像元  
東京都中央区ホーム  
ページ

## 衣服

戦時中には国民服を着ることが推奨されていました。



## 住まい

家には電灯に空襲の標的にならないためのカバーを被せたり、避難するときを使う防空頭巾、ガラスが飛び散らないようにするためにテープが貼られています。

画像元  
[PDF]戦時下のすまい



## 学校

小学校は国民学校と呼ばれていました。戦争中には男子は軍事訓練、女子は竹槍の訓練がありました。また、勤労が重視され、子どもたちは農作業や土木工事をしなければなりませんでした。

## おわりに(大人部員 鷹尾 剛)

「いのち」がテーマとなった第5号。

学生部員からの質問は、「いのちや死」に関する内容が多かった。

「いのち」への絶対的な体験差や、10代を生きる時代背景に違いがある為、東さんの応答を理解することが難しく、それを表現することが更に難しいと感じながらも、そこから逃げることなく発行までやり遂げた。

素晴らしいチャレンジであるため、学生部員に心から敬意を表したい。

東さんへのインタビューを聴きながら私が感じたコトは以下の通りだ。

- ・自分にとって厳しい方向を選択してきた東さん。まさに運命を受け入れ、それに体当たりする覚悟をもって選択をしてきた。
- ・その理由は、家族を護る。国を護る。地域を護る。仲間を護る。その為なら自分の命は惜しくない。その道を選び進んだコトに後悔はない。
- ・死にゆく仲間がいた。しかし私は生きている。この頂いた命、何のために使うべきか？

「九死に一生を得る」という諺がある。これを体験した者とそうでない者とでは、その後の人生に於いて『いのちの質』が違うように思う。もしかしたら死んでいたかもしれない。しかしこうして生きている。

なぜ生きているのか？ なぜ生かされたのか？

もしかしたら、何かするべきことがあるのではないか？

命に終わりがあると受け止めた人は今という時間があることに感謝する。日本における奇跡の戦後復興は、戦争を体験し、多くの方々が『頂きたいのち』を公命とし、いつどうなろうと悔いはないとの想いで、復興に向けて命懸けで生き抜いて頂いた結果ではないか？と想う。

『いのち』の価値を知る東さんから、今からを生きる中学生に貴重なバトンが渡された。ここで受けた感動を忘れてほしくない。また、この新聞を読んで頂いた方々にも『生きている価値』について今一度考えてほしい。なぜ、私は生かされているのか？

そして、いつかはみんな人生の終りがくる。そのことを認識し、魂で理解して上で、今日からの人生を過ごして欲しい。きっと「いのちの質」が変わる。私はそう信じている。未曾有の時代を勝ち抜くには、戦後の復興を果たした東さん達のような人が増えることだと想う。

今という時間は二度と戻らない。いまこの一瞬に体当たりをし、共に生きよう！

## 吉田先生からの感想

今年は、第2次世界大戦の終結から80年の節目を迎えます。第2次世界大戦を経験した方々の高齢化が進む中、私たちは、第2次世界大戦の実体験を直接聞くことができる最後の世代といえるでしょう。

第2次世界大戦において日本は、アメリカやイギリス、中国などの連合軍と凄惨な戦いを繰り広げ、民間人にも多大な犠牲を強いる総力戦となりました。日本が関わった戦場は、アジアから太平洋の広範囲に及んだことから、アジア・太平洋戦争と表現されることもあります。

1941年12月8日に始まった戦いは、当初、日本軍が優勢でした。しかし、1942年に入ると物量に勝る連合軍が優勢となり、日本は後退を余儀なくされていきます。1943年後半には、戦局を打開しようと、航空機による突撃や人間が魚雷を操縦して敵艦に突撃する戦法が提案され、1944年2月には人間魚雷の開発が始まりました。

1944年6月に、戦争継続のために必要な絶対国防圏とされたマリアナ諸島がアメリカ軍に占領され、大型爆撃機による日本本土空襲が現実となります。同年10月には、アメリカ軍がフィリピンに上陸すると、日本軍は戦局を打開するため「神風特別攻撃隊」による攻撃を実行しました。いわゆる特攻の始まりです。以後、日本軍は、さまざまな攻撃隊名をもった特攻隊を編成し、主要な戦法として、また国民の戦意高揚の手段として多用するようになりました。しかし、航空機による特攻だけでも約3950名もの尊い人命が失われました。一方、攻撃を受けた連合軍の艦船でも多くの人命が失われました。(NHKスペシャル「一億特攻への道～隊員4000人 生と死の記憶～」参照。)

海中特攻の1つである人間魚雷「回天」は、「天を回らし戦局を逆転させる」という願いから命名されました。93式酸素魚雷をベースとし、全長約14.75mの先頭に、約1.55トンの火薬を搭載した定員1名の潜水兵器でした。「回天」は、1944年11月20日に実戦で初使用され、1945年8月15日までに420基が建造されました。「回天」は、潜水艦に搭載され、敵艦と遭遇する海域まで進み、潜水艦から分離されて出撃しました。一度出撃すると生還できませんでした。乗員は、海軍甲種飛行予科練習生(通称、予科練生)などで編成され、大津島(現山口県周南市)・光(同光市)・平生(同平生町)のほか、大分県の瀬戸内海沿岸で訓練を積みました。訓練中の事故で命を落とした隊員、出撃して戦死した乗員は計106名、回天の母艦の潜水艦の戦死者を含めると約1300名が犠牲になりました。(山口県周南市の回天記念館のホームページなど参照。)

「回天」乗員の過酷な実態は、横山秀夫さんの小説『出口のない海』が、2006年に映画化されたことで知られるようになりました。しかし、映画公開から18年以上が経過し、「回天」を知る若い世代はどれだけいるのでしょうか。この度、「回天」元乗員の東努さんを志免中学校にお招きして、生の体験をうかがうことができました。戦後80年の節目を迎えるにあたって、元特攻隊員から直接証言をうかがえたことは、志免中学校の生徒と教職員にとって、とても貴重な時間となり、戦争の愚かさ、平和の尊さを改めて考える機会となりました。

東努さんへのインタビューでは、予科練生から「回天」乗員への志願の実態や志願した時の心境、「回天」乗員としての過酷な生活、戦後の「回天」廃棄や機密処理などについての貴重な証言をうかがいました。「回天」乗員となって、「戦争が怖いとか、死ぬとか考える余地はなかった」、「誰かが防がなければならぬ」、「(そうでないと)周りの人たちが敵の手にかかってしまう」と仰った東さんの言葉や表情からは、我々のような非体験者には到底想像できない覚悟を感じました。

また、「戦争を始めたなら、勝たなきゃならない」というお話は、現在のウクライナやガザ地区の終戦の難しさを想起させるものでした。最後に東さんが、「人間が敵をつくって戦争をするのは馬鹿げている」、「命は1つしかない」、「戦争は絶対にしてはいけない」と、力強く仰ったことは、これから生きる私たちへの宿題と受け止めました。

私は、両親の祖母の戦争体験や元ひめゆり学徒の方から沖縄戦の体験を聞く機会がありました。母方の祖母は、夫(私の祖父の兄)が戦死して遺骨が帰ってこなかったことや戦時中の生活を語り、戦争が終わった時に「ほっとした」という心境を述べました。父方の祖母は、従軍看護婦として中国の戦場での看護体験を言葉少なに語りました。また、ひめゆり学徒の方は、動員当初すぐに家へ帰れると思いき、半ば遠足気分だったこと、戦況の悪化で過酷な看護体験をしたことを証言されました。

このように、80年前の戦争を体験した方は、それぞれの置かれた況で、さまざまな感情を抱き、1人1人異なる体験をもっておらす。先人の貴重な証言を直接うかがえなくなるときは、やがてやってきます。そのとき、私たちは戦争の愚かさや平和の尊さを、どのように学べばよいのでしょうか。

現在、日本各地で戦争体験の継承に関する取り組みが進んでいます。例えば、沖繩のひめゆり平和祈念資料館では、若手学芸員による元ひめゆり学徒の体験の継承が本格化しています。また、高校生平和大使による被爆体験の継承、核廃絶運動や平運動は、今年のノーベル平和賞受賞を機に注目を集めました。

では、私たちはなぜ歴史を学ばなければならないのでしょうか。西イツのヴァイツゼッカー大統領は、「過去をあとから変更したり、なかったことにすることはできない。しかし、過去に対して目を閉じる者は、現在を見る目も持たない。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすい」と述べ、歴史に学ぶこと重要性を指摘しています。志免中学校で使っている歴史の教科書1ページ目にも、「歴史は、人々が過去にどのようにして課題を克服しようとしたのかを教えてくれる」もので、「より良い社会を創り出そうとする人々の姿に学ぶことで、私たちはより平和で豊かな社会を追い求めることができる」と書かれています。

しかし、高度情報化社会である現代は、歴史に関しても玉石混淆の情報が氾濫しています。そのため、フェイクニュースや都合の良い情報ばかりを集めることなく、多様な証言や資料(史料)を複数用いて客観的に歴史をとらえ、歴史に学ぶことが、世界平和の実現と次の世代を生きる人々に対する我々の責務といえるでしょう。

(志免中学校教諭 吉田智史)



### 編集メンバー

◆中学生部員

3年生 遠山一夏 市原未菜 松藤咲羽 西村あかり

2年生 小山田ゆい 千藏小英 永田凌太郎 渡辺桐伍 沖平咲希 岡出葵

1年生 住永実咲 松尾風香 山口紗奈 有吉莉駈 茨木慶悟 寺園佑斗 鬼塚絢菜  
宮原来心 白石桃子 當慶大 河口遥斗 廣田このみ

◆大人部員

志免中学校有志の皆さま NPO法人志免地域支え合い互助基金 会員の皆さま



### お問い合わせ

支え合い互助基金のホームページにある  
お問い合わせページを通じて、  
新聞に対するご意見や感想をお寄せください。  
どうぞよろしくお願いいたします。



ホームページの二次元バーコードはこちら →



### ほほえみ 結ぶ しめ新聞

- ・ 2025年3月19日発行 Vol .5
- ・ 発行元/NPO法人志免地域支え合い互助基金
- ・ 住 所/福岡県志免町別府2-2-1
- ・ TEL/092-692-1512
- ・ 発行責任者/理事長 青戸雄司
- ・ 編 集/志免中学校 支え合い新聞部有志の皆さま
- ・ URL/<https://shimekikin.org/shime-newspaper>

